

H. T. バックルの『イングランド文明史』

浜 林 正 夫

I

明治初期の日本の文明開化論に大きな影響を与えたヨーロッパの歴史書といえば、ギゾーの『ヨーロッパ文明史』とバックルの『イングランド文明史』とをあげることに、まず異論はあるまい。しかし、ギゾーについてはともかく、バックルという人物およびその思想については、これまでまとまった紹介はなされていない。結論的にいって、バックルの思想的立場はヴィクトリア朝のブルジョア・ラディカルであったと考えられるが、その思想を明治期の日本の知識人がどのようにうけとめたのだろうか。この大へん興味ふかい問題を考える前提として、ここではバックルという人物、著作、思想について、簡単な予備的考察をこころみておきたい。

ヘンリ・トマス・バックルは1821年11月、ケント州のリーで生まれた。身体が弱かったために学校へゆかず、もっぱら家庭で、とくに母親から、教育を受けた。このことは、本稿ではとりあげる余裕はないが、バックルの女性論に影響を与えていると思われる。バックルは J. S. ミルと親交がありミルの義理の娘ヘレン・テラーは、1872年にバックルの論文・遺稿をまとめて出版しているが、その序文のなかで、バックルが学校へゆけなかったのは幸いだった、と書いている。学校では他人の真似ばかり教え、独創性をつみとってしまうからである。たしかに、もしバックルがオックスブリッジなどへ進んでいたら、ああいう大胆で自由奔放な歴史像はえがけなかったにちがいない。そしてバックルが当時の（そして今も？）アカデミズム史学から袋叩きにあったのも、このためであろう。アクトン卿にいわせると、バックルの仕事は「無教育な、あるいは中途半端に教育を受けたものの仕事」なのであり、マコーリはバックルの大著をひろいよみで一日でよみ終え、「材料を手にいれないうちに体系をつくろうとする予想屋」だと評価した⁽¹⁾。他方、チャールズ・ダーウィンや J. S. ミルはバックルを激賞し、『イングランド文明史』は1920年代までイギリスとアメリカでほとんど毎年のように版を重ね、多くの国で翻訳が出版される驚異的な売れゆきをしめたのであって、バックル史学の魅力はその在野性にあるといつてよいであろう。

バックルは、現代風にいえば「落ちこぼれ」であったともいわれる⁽²⁾、しかし家庭環境には恵まれていた。彼の父は裕福な商人であり、父の死後もその資産によって数万冊の書物を買いつめ、また母とともにヨーロッパ各地をまわり、散歩をかねた古書店まわり以外にほとんど趣味はなく（ただしチェスの腕前は一流で1851年万国博のさいのヨーロッパ・チェス選手権大会に出場したほどであったが、その後、時間の無駄だといつてチェスをやめたという）、もっぱら読書に没頭していた。1859年に彼の精神的な支えであった母が死ぬと、彼はそのショックで心身ともに疲れはて、友人や妹の家を泊り歩くようになり、61年秋には静養のため外遊の旅にのぼったが、62年5月、ダマスカスで熱病のため客死した。

バックルの著作の数は少ない。公刊されたものは雑誌論文もふくめてつぎの4点のみである。

(1) *History of Civilization in England*, London, vol. I, 1857, vol. II, 1861. (古典資料センター Menger Eng. 209)

(2) *A Letter to a Gentleman respecting Pooley's case*, London, 1859.

(3) The Influence of Women on the Progress of Knowledge, *Fraser's Magazine*,

Apr. 1858.

(4) Mill on Liberty, *Ibid*, May, 1859. (これは同年小冊子としても出版された)。

彼の死後、つぎの3点が刊行された。

(5) *Essays, with a Biographical Sketch of the Author*, New York, 1863 (上記(3)(4)をあわせたもの)

(6) Fragment on the Reign of Elizabeth, from the posthumous papers of Henry Thomas Buckle, *Fraser's Magazine*, Feb. & Aug. 1867.

(7) *Miscellaneous and Posthumous Works of Henry Thomas Buckle*, ed. with a biographical notice by Helen Taylor, 3 vols., London, 1872 (上記(2)(3)(4)(6)をはじめ多数の遺稿、備忘録をまとめたもの)。(Menger, Eng. 210)

Fraser's Magazine は本学図書館にはないが、(4)の小冊子は古典資料センターに所蔵されており(Menger, Eng. 208)、(5)は本学にはないが東京大学総合図書館にあり、いずれにせよ、(1)と(7)とによってバックルの全著作を読むことは可能である。この(1)と(7)はその後いろいろな形の抄略版がでており、また(1)のうちスコットランドに関する5つの章だけをまとめた書物(*On Scotland and the Scotch Intellect*, ed. and with an introduction by H. J. Hanham)が“Classics of British Historical Literature”のなかの1冊として1970年にシカゴ大学出版局から刊行されている。

II

バックルは1840年から41年にかけての最初の外遊ののち、中世史を研究する決意をかため、多くのメモを書きのこしたが、やがて1850年ごろイングランドの文明史を書こうと思いたったという。その成果がいうまでもなく『イングランド文明史』全2巻なのであるが、これは未完の書であり、彼の構想ではこの2巻全体が「序論」なのであって、完成すれば全体では少なくとも16巻になるだろうと考えていた⁽³⁾。しかも奇妙なことに、『イングランド文明史』と題されているこの書物の20の章のうち、イングランドをあつかっているのはひとつの章だけであって、フランスについて7章、スペインについて1章、スコットランドについて5章、残り6章は序章的な歴史哲学的考察にあてられているのである。しかもバックルは、このあとはドイツと北アメリカをあつかうつもりだ、とくりかえしのべている。こういう構成からみると、これは『イングランド文明史』というよりは、ヨーロッパ文明史、ないし欧米文明史と題されるべき書物であったといえよう。しかしバックルの関心の中心はつねにイングランドにあった。イングランドがもっとも進んだ文明を有しているのはなぜなのか、他の国ぐに(スコットランドもふくめて)はどのような点においてイングランドよりおけているのか、これがバックルの中心テーマであった。したがって、他の国ぐにの文明史の分析にあたって、つねにその背後にはイングランドがある。その意味でこの書物はイングランドを基軸とした比較文明史なのである。

この書物の内容を詳しく紹介する紙幅はない。要点だけしるせばつぎのようになるだろう。社会には進歩の法則があるが、歴史家は個別の実証におちこんでいてまだ法則を発見していない。コントなどがそれをこころみたが、その方法は演繹的であって科学たりえていない。帰納法によって進歩の法則を発見することが歴史研究の課題である。社会の進歩を条件づけるものは自然的法則(physical laws)と精神的法則(mental laws)であり、前者には気候、食料、土地、自然の一般的景観があり、後者は道徳法と知性の法とに分けられる。ヨーロッパ以外の地域は自然条件がきび

しいために文明は発達せず、ひとりヨーロッパにおいてのみ、人間は自然の支配から脱して文明を
発展させることができた。

このあたりまでのバックルの議論は自然決定論に近く、とりたてて新味もない。しかしバックルの
主要な関心はヨーロッパ対非ヨーロッパという比較にあったのではなく、むしろヨーロッパ内部の
諸国における文明の進歩の比較にあった。そしてそのさいに文明の差をつくりだすうえで重要な役
割をはたすのは自然的法則であるよりはむしろ精神的法則であるとされる。精神的法則のうち、道
徳法はあまり変化しないが、知性は蓄積と伝承が可能であるから大いに発達し、これこそ文明の進
歩を支える原動力となるのである。こうしてバックルの比較文明史はヨーロッパ各国における知性
の発達史の比較研究となる。

だが、いったい文明とはなになのか。バックルによれば、それは戦士階級と聖職者の地位が低下
し、これに代わってシヴィリアンの地位が向上することである。つまり文明とは市民社会の発展と
いうことにほかならない。これを知性の問題としていえば、聖職者の地位の低下は知性の発達と知
識の普及による宗教の権威の低下によってもたらされ、そのためには信仰および知的探究の自由が
不可欠の条件となる。また戦士階級の地位低下は知識の普及によって好戦的心情がうすれてゆくこ
とが重要であり、とくに経済学という学問が成立して、戦争によらずに富を増大させる方法が解明
され、保護主義から自由主義へ移行したことが大きな要因となった。ここでバックルはアダム・ス
ミスに最大級の賛辞をささげる。「この孤独なスコットランド人は、ただひとつの著作を公刊した
ことによって、歴史に記録をとどめている政治家、立法者の全能力をあわせたより以上に、人類の
幸福に貢献した」(p.124)⁽⁴⁾。

文明の進歩を以上のようなものとしてとらえる立場から、バックルはヨーロッパ諸国の文明の進
歩の度合について評価をくだす。フランスには宗教改革がなく、信仰の自由も確立されず、中央集
権と政府による統制がつづいた。フランスでは「子どもの教育さえも、教師や親の判断にゆだねら
れず、国家の統制下にある」(p.357)。しかし学問は発達していて、イングランドのつぎに文明化
している。スペインはサラセンの支配から脱却するために国民統合の中心として王権と教会が強化
され、ヨーロッパでもっとも遅れた国となった。スコットランドでは宗教改革はおこなわれたがプ
ロテスタント教会が権威をもちつづけ、18世紀に「偉大な知的運動」(p.797)があって学問は発展
したが、民衆はいぜんとして迷信のとりことなっている。これはスコットランドの学問がアダム・
スミスもふくめて演繹的方法によっているためである。

III

明治12年にバックルのこの大著を翻訳した土居光華は、その序文でつぎのようにのべている。自
分は日本の歴史書をよんでそれが「今日社会ノ痛痒、文明ノ汚隆ニ影響ヲ生セサル」事件の記述に
終始し、「無用無益ナルコト」を知り、西洋の史書にむかったが、ここでも同じような状況なので
「大ニ失望ノ嘆ヲ発シ」た。しかしギゾー、バックルの2書に出会って心の目がひらかれる思いがし
た。「就中伯克爾先生ノ書、奇抜雄偉、而シテ其ノ今古史家ノ材識ニ乏シキヲ論スル處、最モ余カ
意ニ適合セリ」⁽⁵⁾。土居がのべているように、バックルのこの書物の魅力は、文明の進歩という視点
から明快に歴史の流れを割りきったところにあり、人物や事件の評価も痛快なほど率直である。そ
の例をあげれば際限ないが、たとえばアン女王は「馬鹿で無知な女」(p.237)であり、モンテスキ
ューの『法の精神』は方法的にはすぐれているが内容的には「ほとんど完全に失敗」(p.468)であ
り、ヒュームは深遠な思想家だが構想力に欠け「大理石のように洗練されているがまた大理石のよ

うに冷い」(p.820)。ファーガソンの『市民社会史』は内容貧弱で、「このぐらいの本なら賢い中学生でも書けるだろう」。⁽⁶⁾

比較文明論としてとくに興味ふかいはスコットランド論である。すでにのべたように、バックルは18世紀のスコットランドの学問の発展を(自然科学もふくめて)きわめて高く評価する。イングランドの方は、ニュートン以後は独創的な思想家はほとんどあられなく、歴史家も18世紀イングランドでは「きわめて愚鈍な知性と乏しい学識の人物」⁽⁷⁾しかいなかった。しかし社会全体としてはイングランドの方が進歩しており、スコットランドの方がおくれていた。なぜか。それはスコットランドの学問が知識人だけの学問であり、民衆のあいだにひろがらなかったからであり、その理由は学問の方法論そのもののうちにある、とバックルは考える。⁽⁸⁾スコットランドの民衆がまだいかに迷信にとらわれているかを証明するために、彼は「アネドトの宝庫」といわれるぐらいたくさん⁽⁹⁾の事例をあつめており、そこにはヴィクトリア朝のイングランド人のスコットランドにたいする偏見も濃厚に感じとられるにせよ、おくれて文明化の道を歩みはじめた後進地域の、いわば文化の二重構造とでもいうべき問題をそこによみとることもできるように思われる。

最後に、私にとって興味のあるもうひとつの点は、バーナード・ショーが指摘したバックルとマルクスの類似性の問題である。⁽¹⁰⁾知性の発達を歴史の進歩とみるバックルと、生産力の発展を歴史発展の原動力とみるマルクスとでは、まったく共通性はないようにみえる。しかし、歴史の法則性を強調したということ以外にもつぎの諸点で両者の間にかかなりの類似性をみいだすことができるだろう。

(1)自然条件のきびしい地域においては王朝の交替はあっても人民の状態は変わらないという指摘(p.46)。これはマルクスの「アジア社会の不変性の秘密」を思いださせる。(2)知性の発達⁽¹¹⁾は富の蓄積によってはじめて可能となるのであり、富の蓄積は温和な自然条件のもとにおける「労働の規則性」によって生みだされる(p.24)。ここには、労働→富→知識→文明というシェーマがある。また、富は権力の源泉であり、その分配の様式が権力のあり方を決めるという指摘もある(p.29)。(3)自由をつくりだしてきたのはミドル・クラスの勃興であった。この点にイングランドとフランスの差があり、フロンドの乱は党派の争いとどまったが、同じころのイングランドの大反乱は「階級闘争」(a war of classes)(p.371)であった。別のところでバックルは「イングランド革命」といういい方もしており、さらに別のところでは、「蜂起は一般的にいて悪であるが、革命はつねに正しい」(p.625)ともいう。17世紀のイギリス革命を「階級闘争」としてとらえたのはバックルが最初ではなかろうか。

もちろん、バックルにおける歴史の進歩はブルジョア自由主義をもって終わる。彼は穀物法廃止までのべながら、チャーティズムにはまったくふれていない。しかし彼のラディカルな自由主義は世界各国の自由主義者に大きな影響を与え、とりわけ19世紀後半のロシアのニヒリストたちにも⁽¹²⁾もつよい影響を残したのであった。

(1) G. A. Wells, *The Critics of Buckle, Past and Present*, 9, 1956, pp.76, 87.

(2) J. Kenyon, *The History Men*, London, 1983, p.108.

(3) cf. *Ibid.*, p.114.

(4) 引用ページは J. M. Robertson ed., *Introduction to the History of Civilization in England by Henry Thomas Buckle*, London, (1904) によってしめす。

(5) 土居光華、萱生奉三全譯、伯克爾氏著『英国文明史』明治12年、宝文閣、p.2.

- (6) *Miscellaneous and Posthumous Works*, vol. I, p.202.
- (7) *Ibid.*, p.203.
- (8) しかしバッケルは『ミル自由論』のなかでは、科学の方法は演繹的でなければならないとっており、この主張が『イングランド文明史』におけるスコットランドの学問のあり方にたいする批判とどう関連するのかという問題を残している。
- (9) H. T. Buckle, *On Scotland and the Scotch Intellect*, ed. by H. J. Hanham, Chicago, 1970, p.xxx1.
- (10) cf. *On Scotland and the Scotch Intellect*, p.xxii.
- (11) *Miscellaneous and Posthumous Works*, vol. I, p.134.
- (12) cf. *On Scotland and the Scotch Intellect*, p.xxiv. この編者解説によるとロシアのニヒリストでバッケルの影響をもっともつよくうけたのはディミトリ・ピーサレフであったという。

(一橋大学経済学部教授)